

光文社文庫

長編推理小説

愛の海峡殺人事件

山村美紗



光 文 社



光文社文庫

長編推理小説

愛の海峡殺人事件

著者 やまむらみさ 山村美紗

昭和59年9月10日 初版1刷発行
昭和63年7月25日 15刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印刷	萩	原	印	刷
製本	光	洋	製	本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 東京都文京区 音羽 2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京6-115347

© Misa Yamamura 1984

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-334-70008-X Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

愛の海峡殺人事件

目次

二十七年目の疑惑	5	疑惑の萌芽	193
時間の断片	28	殺害の論理	213
過去の告発	67	あばかれたトリック	231
最初の殺人	89	懐疑の裏付け	244
夫との再会	116	終末への整理	258
第二の殺人	147	あとがき 山村 美紗	269
悪意の暴走	174	解説 中島河太郎	278

この作品は、ソウルを舞台にした、完全なフィクションです。実在の人物名、団体名とは一切関係ありません。

第一章 二十七年目の疑惑

1

野際彩子のぎわさいこの住む、東京郊外のS市では、郵便物は、毎朝午前十時に配達される。

昭和四十七年十一月七日、彩子は、洗濯をすませてから、郵便受けをのぞきに行った。デパートのダイレクトメールの他に、葉書が二通入っていた。

彩子は、門のところに立ったまま、表書きに眼を通した。

一通は、韓国のソウル市からの絵葉書だった。絵は史蹟に指定されている南大門付近の景色である。

過日、韓国オールサッカーチームを率いて渡日した際には、過分のおもてなしを頂き、有難うございました。竜田先生たつたの生前のことなど、いろいろとお話しでき、楽しゅうございました。ソウルにお出での折りは、ご一報頂ければ、ご案内致す所存です。ご主人様によろしくお伝え下さい。

ソウル市オールサッカーチーム

監督 崔 洛馨

少し、旧式ながら、日本文で書いてある。

竜田先生というのは、彩子の亡くなった父のことである。戦前、父の竜田信造は、現在のソウル法律大学の学長をしていた。温厚篤実で学生たちの間に人気があったと聞いている。

終戦で、家族は、離ればなれになり、母と姉の秋子と当時四歳の彩子が、日本に帰ったあと、残務整理に残った父は、ソウルで急死した。

病死ということだった。

崔は、その頃、竜田の学校の自動車運転手をしていた、崔吉俊の子供である。

もう一通は、「厚生省援護局」と印刷された公用らしい葉書であった。

もちろん、宛名は夫の野際浩二になっている。

野際は、今、九州に出張中である。何か急用なら、知らせなければならぬと思って、裏面を読むことにした。

大韓民国からの引揚者のことにつき、ご相談したいことがあります。
左記日時に、おいで下さい。

日時 昭和四十七年十一月七日 午後一時半

場所 厚生省援護局援護課

野際浩二殿

いかにも役所の文書という感じの、味もそっけない文章が、タイプ印書で打ってある。夫も、彩子と同じ韓国からの引揚者である。引き揚げのときは、お互いに、引揚援護局の世話になったが、もう二十七年も前のことである。今さら、何の用があるのだろうか。

まったく別の用件かもしれないが、それにしては、思い当たることはない。

とにかく、夫が帰ったら、すぐわかるように、夫の机の上に置いて……と思いつながら、ふと気づいてよく見ると、呼び出しの日時が、今日の午後一時半になっているではないか。

彩子は、あわてて、夫が泊まっている九州のホテルへ電話を入れてみた。が、外出しておられます、との返事がかえってきた。

彩子は、困惑した表情で、しばらく考え込んでいたが、夫に代わって、自分が、厚生省へ行ってみることにした。

どうせ、留守中の退屈しのぎに、都心へ出て、デパートをのぞいてみようかと思っていたところなので、その前に、ちょっと、寄り道すればいい、と考えたのである。

2

彩子は、三十一歳だが、小柄で派手な美貌のせい、二十六、七に見える。

子供がないからかもしれない。

今日は、固苦しいお役所へも寄るのだから、と考えて、地味な藤色の和服にした。

郊外の自宅から東京駅に着いたのは、一時を過ぎていた。時間に間に合ったと、ほっとして、厚生省のある霞ヶ関の官庁街までタクシーを飛ばしたが、一時半ジャストに厚生省に着いてみると、なんのことはない、向こうの都合で、三十分近くも待たされてしまった。

中年の援護課長は、待たせたことを詫びようとはせず、彩子の顔を不審気に眺めて言った。

「野際浩二さんは？」

「主人は、仕事で九州へ出かけています」

彩子は、腹立たしさから、堅い声で答えた。

課長は、しばらく考えてから、

「あなたでも、わかりますかねえ」

と言った。

「それは、お話の内容によると思いますわ」

彩子が、堅い声で言うと、援護課長は、初めて、ちょっと、びっくりしたような顔になって、

彼女を見た。

「とにかく、お話ししましょう。韓国妻というのをご存じですか？」

「ええ。私も、韓国からの引揚者の一人ですから、知っています。戦時中、韓国の男の人と結婚した日本人の女の人のことでしょうか？」

「そうです。現在、そのうちの二万人近い人が、帰国を希望しているのです。年齢は、だいたい五十五歳から六十五歳の女性です」

「帰国を希望しているのなら、どんどん、帰国させてあげればいいじゃないですか？」

「政府としては、日本に、親戚や知人といった身元引受人がいる者に限って、帰国を認めることにしているのです」

「……………」

「磯貝文子という女性をご存じですか？　韓国名は、宗鶏林です」

「いいえ」

「実は、彼女が、今、お話しした韓国の人と結婚した日本女性で、三年前に夫に死なれてから生活に困っていて、最近日本に帰りたいといって帰国を申し出ていました。そこへ野際浩二さんが身元引受人になると申し出られたので、今度、帰国できることになったわけです。このことはご主人から、お聞きになっていませんか？」

「いいえ」

彩子は、首を横に振った。すべて、初めて聞く話だった。貿易商である夫は、戦後も、仕事のこと、何度か韓国に渡っている。

その時、ソウルで、磯貝文子という日本人女性に会い、同情して、身元引受人になったのだろう。夫のそんな気持ちは、理解できなくはない。

夫は、優しい性格だし、彩子と同じように、韓国からの引揚者だから、磯貝文子の境遇に同情したのだろう。だが、なぜ、すぐ、彩子に話してくれなかったのか？　それが、不満だった。

援護課長は、そんな彩子の当惑など知らぬげに、「それでですね」と、どんどん、先に話をすすめていく。

「磯貝文子さんは、先月、帰国して、現在、東京にある宿泊所に入っているのですが」

「もう、日本に帰っていらっしゃるんですか？」

彩子は驚いた。

「そうです。そこで、身元引受人である野際さんに引き取っていただくことになっているんですが、今になって、当人が、個人のお宅でお世話になるのは心苦しいから、東京で一人で暮らしたいと言いだしたのです」

援護課長は、苦りきった表情で言い捨てた。

日本に帰って来た韓国籍の日本女性は、殆ど、東京を離れたがらないのだという。東京という大都会の中でなら、なんとか暮らしていけるが、地方都市に行くと、暮らしていける自信がない

というのだそうである。周囲の眼も、気になるのだらう。

「それでですね。とにかく、当人に会っていただけませんか？　できれば、あなた方に引き取っていただきたいのです。どうしても、東京で生活したいのなら、その方面の協力をしていただけたらと思います」

援護課長は、それだけ言うと、もう、立ち上がっていた。

代わって現れた若い課員が、小さな紙片をひらひらさせながら言った。

「とにかく、磯貝文子さんにお引き合わせしますので、ご一緒願えますか？」

どうやら、手に持っている紙片は、配車伝票か何からしい。

思いがけず面倒なことになってきたので、気は進まなかったが、今さら、「夫が帰ってから……」と言って逃げるわけにもいかなかった。

上野駅に近い、ゴミゴミした町中に、その建物はあった。木造モルタル塗りだが、そのモルタルの壁には、亀裂ができ、屋根瓦は、ところどころ欠け落ちている。

若い役人は、

「うちには、適当な施設がないもんですから、都の施設を借りて宿泊所になっているんですよ」などと言いわけしながら、受付を無視して事務室の中へはいりこみ、係官に用件を伝えた。まもなく係官が、一人の老婦人を連れて戻って来た。紺のストラックスに、セーターとカーディガンを重ねて、それでもまだ寒そうに、青黒い顔色をしている。

生活の疲れからか、五十九歳だという年齢以上に、やつれて見えた。

係官は、

「磯貝文子さんです」

と簡単に紹介すると、自分の席へ戻って、また書類整理を始めた。

磯貝文子は、深々とお辞儀をしたあと、頼ってきて迷惑をかけることの詫びを言った。そして「彩子さんですか。あの頃は四つぐらいでしたのに大きくなられて……」

と、なつかしそうに彩子の顔を眺めた。

「私は、終戦前には、野際さんや、あなたのお家のご近所に住んでいたのですよ。野際さんとはあまりおつきあいしてませんでした。お宅のお母さんとは、随分親しくしていたものでした……」

彩子は、母と親しかったと聞き、安心すると同時に、急に親しみを覚えた。

「みなさんは引き揚げられました。私は日本へ帰っても頼る人もないままに、韓国人と結婚してずっと韓国にいたのです。ところが、つい半年ばかり前に、ソウルの街でひょっこりご主人にお目にかかりました。」

ご主人は、あの頃、お父さまの学校の学生で、お顔を知っている程度でしたが、なつかしさについ声をかけたのです」

彼女の話すところによると、彩子の夫は、磯貝のあまり豊かそうでない服装に目をやって、

（旅行で来ているのでもなさそうだが、どうしてここへ？）という意味のことを言っただけ。

そこで彼女は、韓国人の妻になったこと、その夫が三年前に亡くなって生活に困っていること、それで、日本へ帰りたいのだが、それには身元引受人が必要なことなどを話したという。

「いえ、私も初めから、野際さんに身元引受人になってもらおうと思ったわけではなかったのです。むしろ、お宅のお母さんだったら引き受けてくださるのじゃないかとあてにしておいて、『あのころご近所だった竜田さんはどうしておられるでしょうか』と聞いてみたのです。すると、ご主人が、竜田夫人が引き揚げ後亡くなったこと、その娘のあなたと結婚した、ということをお話して下さったのです」

「そして、主人が、日本へ来るように言いましたのね？」

彩子は、夫が文子を引き受けたいきさつがわかってきた。

彩子が、どう応えたものかと迷っていると、文子は、

「でも、これ以上、ご迷惑をかけるのもなんですし、地方都市では、仕事もないと思います。ここにおいていただいて、私にできる仕事を何か探して自活したいと言っているのですが……。どうしてもここは出ないといけないというのです」

今、ここにいる人達はみんなそれを要求して、東京都や厚生省に陳情しているのだという。その必死な顔色に打たれて、彩子が、

「じゃあ、主人と相談して、アパートかなにか借りることにでもしましょうか」

と言うと、文子は顔中によるこびをみなぎらした。

そのあと、文子は、突然、袋から古びた一冊の日記帳を出した。

「お父さまの日記です」

と言われ、彩子はびっくりした。

文子は、彩子の父の日記を手に入れた事情について、次のように説明してくれた。

彩子の父が亡くなる一週間ほど前のことである。

昭和二十年十二月八日、磯貝文子は、韓国人の夫のところへ引っ越すことになり、残っていた彩子の父から、日本と韓国の国交が復活するまであずかってほしい、と言って、リング箱を二つあずかった。彩子たちが引き揚げたあとだった。

当時、日本へ引き揚げる日本人は、一人千円のお金と、手に持てるだけの荷物しか持って帰れなかったから、あとのものは捨てていくか、信用できそうな韓国人にあずけて帰国したのである。リング箱の中身は、彩子や姉の秋子の描いた絵だとか、彩子の父の日記帳、家族の写真アルバム、彩子の母の手づくりの人形、親子四人が旅行した時に買い求めた絵葉書等であった。

他のものは、境遇がかわり、家がかわるごとに整理してなくなってしまったが、日記帳だけは、家族の人に渡してあげようと持ち続けてきた、というのであった。

彩子は、感激してその品を受け取った。

しかし、その時、文子が何気なく洩らした、

「彩子さんに読んでもらえば、殺されたお父さまも、浮かばれるでしょう」

の一言が、彩子に強いショックを与えた。

父の死を病死だと思っていた彩子は、蒼白な顔をして、文子に父の死亡時の事情を聞きただけた。

当然そのことを知っていると思いこんでいたらしい彼女は、あわてながらも、事情を話してくれた。

彩子の父の竜田信造は、終戦の年の昭和二十年十二月十四日の夜、何者かによって電話で外におびき出されて、翌朝、死体となって発見された——というのである。

文子も遠くへ引っ越してからのもので、すぐには知らず、二、三日たってから聞いた、ということだった。

預かっていた父の日記を読むと、当時、父を取り巻いていた人間関係や、父を殺すことで得をする人物が、三人もいることがわかった、というのである。

「まあ、それを知らんになるとわかりますが、お父さんは、その三人の誰かに殺されたのですよ。私に日記を預けられたのも、虫が知らせたのかもしれない」

そう聞かされた彩子は早く父の日記を読んでみたくて、文子の住居については、後刻連絡すると約束し、急いでそこを辞した。